年 頭 の ご 挨 拶

―還暦を迎える「まてりあ」に寄せて―

公益社団法人 日本金属学会 会長　高　梨　弘　毅

新年，明けましておめでとうございます．皆様にはご健勝で新年をお迎えのこととお慶び申し上げます．

昨年は，新型コロナウイルスのパンデミックに明け暮れた１年でした．4 月の第一波，8 月の第二波に続き，我が国は現在第三波に見舞われています．昨年 4 月から会議や講義のほとんどはオンラインとなり，飲食を伴う会合は強く自粛が求められています．私自身，4 月以降は出張や会食を一切しておりません．本会会長に就任して，いきなりコロナパンチを受けた感じでした．このように不自由で鬱屈した毎日がいつまで続くのか，不安に思われている方も多いことでしょう．しかし，いかなるパンデミックも，時とともに必ず終息していきます．本年が皆様にとって希望の持てる明るい一年になりますことを願っております．

さて，パンデミックは，本会の活動にも大きな影響を及ぼしました．その一つが，昨年の春期講演大会の中止であり，さらに秋期講演大会がオンライン開催になったことです．オンライン開催は本会史上初めての試みでしたが，700件以上の講演と1400名近くの参加者があり，通常の講演大会に比べても遜色はなく，成功裡に終えることができました．これは，御手洗容子先生を始めとする講演大会委員や事務局職員の献身的なご尽力と会員の皆様の温かいご協力による賜物であり，厚く御礼申し上げます．パンデミックの終息が見えない中，来年の春期講演大会もオンライン開催が決まっています．オンライン開催は，現地開催のようにさまざまな人たちと自由に気軽にディスカッションをする機会を持てないことや，論文として未公表の結果は出しにくいなどの問題があります．しかし，その一方で，旅費と時間をかけて現地に行かなくても，オフィスや自宅からでも参加でき，参加者の多寡に関わらずプレゼン用のスライドをパソコン画面でじっくりと見ながら聴講に集中できるというのは，大きな魅力です．今後パンデミックが終息した後も，講演大会のみならずセミナーやシンポジウムなどの一部に，必須のツールとしてオンラインは取り入れられていくでしょう．なお，パンデミックに対する対応として，本年度に限り学生員の会費や秋期講演大会の参加費を免除させていただいたことも，ここに申し述べておきます．

私が会長職を仰せつかってから，特に取り組んでいることとして，広報活動の強化があります．本会は，金属のみならず材料科学全般に関して，さまざまな事業を推進しています．しかし，広報活動が不十分であるために，そのことが社会一般の人々はもとより，本会の会員自身にも必ずしも十分には知られていません．そもそもこれまでは，本会の中に広報を担当する理事がおらず，そのような組織もありませんでした．そこで，柴田直哉先生に広報担当理事をお願いし，産業界および学界のそれぞれからどちらかと言えば若手の会員を選出し，広報推進ワーキンググループ(WG)を立ち上げました．WG の活動は始まったばかりですが，新しいロゴマークやキャッチフレーズの作成，ホームページの全面改訂，SNS 活用の検討，魅力ある学会紹介パンフレットやポスターの作成，小中高の学校や民間企業へのアウトリーチなどに積極的に取り組んでいく予定です．私も WG 会議にオブザーバーとして参加していますが，広報のみならず本会の役割やあり方など，根本的な問題に関して毎回侃々諤々の議論が行われており，大変頼もしく感じています．WG 会議で出される若手の意見を採り上げ，理事会を通して，本会の運営や活動に反映させていくことが，私の役割だと思っています．

広報活動にも関係しますが，国際交流も重要な課題です．本会は，日本の材料科学を代表するコミュニティとして，国際的認知度を高める必要があります．最近 ASM International から連携の提案があり，学生を含む若手研究者の相互派遣や講演大会での国際セッションの開催などが検討されています．現在はパンデミックのために活動が制限されていますが，今後はこれまで連携を行ってきたKIM(The Korean Institute of Metals and Materials)や TMS(The Minerals, Metals & Materials Society)なども含め，総合的かつ戦略的な交流活動を進めてまいります．

本会は，会員数の減少とそれに伴う収益や講演大会講演数の減少に長く苦しんで参りましたが，ここ数年は関係各位の並々ならぬご努力による多くの改革を通して下げ止まる傾向が見え，回復する兆しも現れています．今まさにこれから本会が上昇気流に乗っていけるかどうかの瀬戸際にあります．このような節目のときに，新型コロナウィルスのパンデミックという世界全体を揺るがす未曾有の大事件が起きたことは，きわめて示唆的です．世界は今大きく変わりつつあります．この変化は不可逆で，たとえパンデミックが収まってもけっして元に戻ることはなく，世界は新しい時代を迎えることになるでしょう．本会もまさにこれから新しい発展のときを迎えると信じております．

本年,「まてりあ」は第60巻となります．すなわち創刊から60年目を迎えます．いわば還暦です．還暦とは十干十二支が一巡りして，新たに生まれ変わることを意味します．この創刊60年を祝して,「まてりあ」に対する一文を寄せ，本稿を締めくくりたいと思います．

私が最初に「まてりあ」と関わったのは，まだ「まてりあ」という名称はなく「日本金属学会報」と呼ばれていた1992年の第31巻に解説を書かせていただいたときに遡ります．当時は，金属人工格子の重点領域研究(現在の学術変革領域研究)が設定されているときで，その特集号の中の一つでした．それから今日まで計８編の解説を書かせていただきました．また，ミニ特集等の企画も３件させていただきました．けっして大きな貢献とはいえず，心苦しい限りですが，今あらためて当時の記事を振り返ってみると，金属人工格子の研究からスピントロニクス，そしてスピン流へという自身の研究の流れを追うことができ，感慨深いものがあります．スピントロニクス分野は，現在どちらかと言えば物理やデバイスに重点が置かれているように見えますが，その起源は金属人工格子という材料の研究であり，新分野の創出には新材料が欠かせないことをこの場を借りて強調しておきたいと思います．

私が本会の運営に携わることになったのも，1997年に「まてりあ」の編集委員になったことが最初です．当時は，本会の事務局はまだ青葉山の金属博物館(現在閉館)の中にあって，委員会の際には金属材料研究所のある片平から車で通ったことが懐かしく思い出されます．2009～2011年には編集委員長も務めさせていただきました.「まてりあ」の良さは，特定の分野に偏することがなく，多様な材料やその周辺分野全般について理解を深めることができることだと思います．最近では,「金属なんでもランキング」や「金属素描」などの楽しくかつ役に立つ記事もあり，魅力ある会報作りに編集委員の方々が工夫され，努力されていることに深く敬意を表します.「まてりあ」は講演大会と並んで本会活動の要であり，次の60年(すなわち第120巻！)に向けて，引き続き多くの読者に親しまれていくことを願っています．

最後になりましたが，会員の皆様のますますのご健勝とご発展を祈念いたしまして，年頭のご挨拶といたします．

2021年１月１日